



本文
1
推言の巻
高野の巻



今皇のまうしはと秋のまの所まうしん
加の金城を去も中四里はちりにて表老
年中よ飛もき湯涌とる湯泉と好む心
うね山浮く樹とけり都とよな富
も所ながくももりしむるも
あつるまの枝葉乃まはるけり
希田志少ふはとてと考集りて正風
人物遠と題号しけり門人後れ世を
せんりけりまはるけり

二
七

一のありてうち終るに仲叔の合教の重り
 事体おほくおもひおぼえにむらじりて
 けい佛の世説と号し多類と持ぶらる
 とらん多類も婦人ありりしとて利意
 せらるゝおぼえに地乃心と号し
 揚子とていへ天明已久春もさる
 ありと蘭更とていへまはる

誹諧世説卷之一

目録

- 芭蕉翁風雅の志を示説
- 蕉翁笠人の教化の説
- 蕉翁義仲寺新奥寂れ説
- 万子翁餘別の説
- 能頃蕉翁の令終と巻説
- 門人蕉翁の辭世と巻説
- 蕉翁加州金昌寺一宿の説

蕉翁内藤君誦諧の説

万子蕉翁ふ初て對面の説

誦諧世説卷之一



芭蕉翁風雅の志を示説

芭蕉翁え縁行柳に終るらん令城ふ志りて杖
 臥休え流くる時小春中うて一夜會合りしはその
 席に答應ふ海の珠物紙はる紙若葉をけりしる
 十う多かりし其終ふは會れ事を治りたるに
 翁曰らん人のことさしんづひの程さしんづきあつ
 どそれと悟りてハ大名の侍成のおごりうてさふ
 風雅のさびさしんづき紙をせ紙はさしんづき

めぬとさういふてある六州海を船造りて疲れりて
浴びのたふさるる舟のりよしゆれるを志のくしが
ほやよるうらにき一況やからぬ物厚味豊容
さくふさのちささるんやさかして家と定と
結いんとさひ冷や合ふれがとちよるいづなまし
こゝぬ紙よりもさくくいさ紙よくちうて思
風雅のさびをきくと冷やなるとさるれさうその
ほよ後の川よりなり一室居ると合序なり人か
の滅しぬせをぬくさおちやうなく茶茶下くちら

びりり器をわくさくさく何をもあはれやまはま
箱日席もたや困がれんくれば後をわづる冷飯の
餅さうささるべうとちうたれんくちやさるさ
こえほいよけさく餅をたさそまう共まうけのら
やうぬを謝さるに終るささながう諸礼信止風雅の
書制なりけの謝さるるやわんさくさく圓居り
とて茶漬一二粒らうくとちうさく先風雅かくさ
つゝ両けりんをてて酒舎の常不流を費して飽の
味をとらうはは里戯場は物好く風雅の序さくさ

なりといふ言とありしれども今城の人くけ細と感
それよりしていとのびらるるを戒め風流と粉骨と
るふぬく故とありても小杖使を抑舎のてん徳小
いあるくぬきする人のあまし事もいづか原教
戒をせといく事りぬる故とて是も人よ福の訓誨
比ゆとやうなるんよりて今城の人く細とけしむ
事成るく亦へ今の世までもころにけりて終成る
と家の基とほさうたり

白きうーさひーれ味を忘るか芭蕉

蕉翁上人の教化の説

くを成給あるとれ世のゆる成をうけ人よるそは
づりそこけりる形たどり草鞋の法たんあし行の
細杖をたのみにけ一足づつしんみゆるうらに日記もわ
は林うほくと小舎のふもたどりゆれ経てつてあう者
てけりる人そくつさ原うか人の本流よりあまら者
ありつあかき終しとありやうゆるう其要人目志の
なれほささ成るうう長さお操よまら人なるおのと
ここ人ありれおころ是らそせよすくし旅人のものと

掠てこれ一枚を返る白波といふものゝあやと疲まゝ
 足をとくやえりこ流す彼男等とをわらひしやうは
 ぬらうらうらふ名のい流もわう流うして其面ひを
 このまゝするものゆゑらあぢく流りしんやとも解
 事志をせをいつふあぢくは門ありとてわく屋を振
 なうと暫し極くのまゝはくあぢくたあよまはりて
 てそいつへと待り情愔のかゝる眼のくらまぢといひ
 流し記をせものあり翁とすゝも勢を流すを我々
 子流於舟つゝ流すささめぬ料撒れ境界のつひ陰殿

小娘をぬくらくゝせさうれい蔬一枚のワビ寢を楽しむ
 れとよりあはれすゝい一物をほゝえはる戀いゝれものすを
 皆人の縁をよませて是坂用のねと今川にやう紙を楽
 んはせやうすてつゝ川のあまの物貯へまゝ坊まゝあ
 ど次や金浪のそあ屋のねとの懐かゝあたる修好者ゝあ
 ねをよのちる旅人と思ふあをそゝとゞも麻相るれれ
 どゆゑもいゝゝたゝゆゑれはゞゆるゝはゝゝゝゝゝ
 先負なる風呂敷をを投りし流すをかのゝせゝものも
 おたうてしをれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

旅者世説



2



言言七言

四

紙中成るははるあまとお振ひるまじりも是とこと
 思ふたれ物ハ何ともさへ思人たもあまれ果て押し何れ
 たり金貨傳ふると案にお透の敷色してはれ目と目紙
 又合きて居るう菊きこひての寝ゆく我れとの細産なら
 ともほりた物あはのそふはうすべとさけるに思人たハ
 ねらうど海の塩く記すも其思ふもあまの寝とさう菊
 ともかぬたかくと下れ被衣もぬぬさるて赤羅しそ
 之清く思人たもい衣被をさるあまにいつともさうあま
 ともさうあまにさひく衣と被ほさるとさへと思つたあま

ともや用なるとくけくと寝ふまきんとする被をいふ
 へ因果歴然を常迅速の事なく移んあまふあまに思ふ
 思人たがうふ被といさるさへ思ふさう思ふまきとく
 思ふさうとやしたく己う不若紙掩いとあまとしてん被の
 思ふさうと事紙感として一日もい業なき被もあまに思ふ
 思ふさうと外に思ふさるいさるさなれはいつハせんと思ふ
 あま思ふて居るさるは紙一休禪原れふさうに思ふさる
 これの思ふさうてさう今倍とさう思ふさる思ふさる
 思ふさうと思ふさる風情もや思ひ思ふさる思ふさる

きみを加たふ馬耳た東風をうらも又因縁もたれ
 度れやとあふしくくれく教守中とれと下恩のうら
 ぶらなしくいひ思人たはさうくとねまうとてはつら
 ともなく迎ふぬ翁らそれより杖取もやめて人里と望
 一れ方にぬらぬ杖を仰てた上枯のきさうくとて
 中家といふに執務うかきる紙片を感して

利きくろもは時の事なりとぞ
 芭蕉

かきまへしもは時の事なりとぞ

蕉翁我仲守雜奥寝の説

ちや紙の得て故をて湖南の義仲守とて雜奥寝の
 其ほく先くハ四月朔日なりうとて外面ハ紙張をうら
 多くあまも翁を扱ふ對してうらわの賣を紙片と
 くんが紙いとそのわと者さうとてうらわの賣を紙片と
 其をを紙片とて郭も唱ふとて故の賣とてうらわ
 るんやそれを人よえんとてうらわの賣を紙片とて
 う是紙片とて價を紙片とてうらわの賣を紙片とて
 實に朝之を四の紙片とてうらわの賣を紙片とて
 なるもの同くうらわの賣を紙片とてうらわの賣を紙片とて

是等の如く第一の滅掃とらるるを以て今言
 るに今この如く志はけいては白紙おのりも人の
 と成りえんことを果たぬ力あるに近づくに成す
 事の如何ぞの紙張賣の如きや

万子翁後別の説

は万子翁小園の脚の時金城の万子遅くしておとれ討面
 後またるゝ紙張賣はけいて翁の如きとて保るに
 おもひにねばりて追付らぬ討面つて馬れぬおとれ
 白紙の今とておとれぬ翁の口におもひに第一紙張賣を
 楽しては成す

おとれぬ翁の如きとておとれぬ翁の口におもひに第一紙張賣を
 楽しては成す

能成翁翁の命終を参説

芭蕉翁六十好まいて世にさうけひいと加賀小松に連歌
 能成翁翁の命終を参説
 りぬぬとておとれぬ翁の口におもひに第一紙張賣を
 楽しては成す



又はうしつ終一車に終多しとくはく
 とし終多減ふ一途了信然の者の志と斗管を
 人の同然とてさよけんばとらるる

門人蕉翁の辞世とる説

芭蕉翁終馬の初ふ抱えふとらるる人々
 辞世の事とるのしつに終完あつて曰吾の一
 生ははとてむたる事ハ皆辞世とる人々といふ
 事やさしは今更辞世とて介のさつとるもつ
 ごとく言へしつとらるるぞ誠よ蕉門血脈相傳乃教

訓とてなごきさとのを

蕉翁賀加金昌寺一宿の説

芭蕉翁れく乃知通のうら加州大聖寺の金昌寺
とつみちあく

庭掃てあやや寺ふらる柳

け白のけみ故あく白さうをまお牧曾良けさう一宿
に故ふ芳良を糸してかくハア子種ぬとえ内世説徳
行篇よ郭林宗ハ方正の士うて逆旅よやごる事
の終へうさうとてま亭を掃除して過りそる

来うく深旅くけわうさほとえて則牧翁郭林宗が
屋ごうたうをを知くうう翁け故み成とてら
柳子對して牧翁曾良やごるたう條を感慨あり
しと是を説向ふとらる白きまづ俗中の説
る言らみ中にて翁のまやごの終うら門の
終うらとてう者あまご翁のけ白意其外まふ
姓子の白けと成りて考ふまづらてとじまを
るねと成りてた事ハ知々の書ふかづらて略ん

若録集よ翁塚

かみあしてわづらひのどい 曾良

蕉翁内藤君誹諧の説

くや代翁あつ時内藤露沾天の由えへる終く
誹諧ありたり主君ありとらう烟草を擲ひ終く
故に翁もこそ序とていたを香結りど其角も
其序ふけりねあつて翁ふつてま借勢ハ酒落風
流をりて中意とんあうふ威権も怖くかゞば言
位も思とぞうとぞと今日内藤君の序序ふ
て烟草を香結らざりハ編ハ何とらとらんう小牙

是く惑ひぬと雖ども翁莞尔とて曰ひ疑ハ誹諧
何のそを先ふと取とつとやと女へざりああり夫誹諧
ハ小技なりとつどもよく用る時ハ一及なり去り六
風流のうらうも豈れ節と忘るべまや法破破
とこそ酒落ととらハ禁射の後るり盤城省て
風流と笑くさハ頰愚の倍るり德行の君子六上
浪者れうとするふらだ今日何ハ君の雅逸に
烟草を禁一たるハ編ハあくと禮るりいんとされ
ハ我一分乃乞丐紳なる控坊主とつども風雅乃

乃ふ遊ひ塵尾を握くこ三子のよみふは是をこして
 二三子象上宗西の傳名をゆくとけ故小露依
 君の孫をくゆりて控契をささるる紙堂の志くくバ
 夫人れ市御とそを忌嫌ひ結ぶるもとるこいそ人と
 蔑ふもるものうして趙高が鹿とりて馬ふすらの
 罪を免くもさげたふ象が桐草と名さるる礼なり
 孔子のことばも志づく控を行者ら世人縮りと
 云とのゆへう嗚呼古今の習俗るやとて歎息し
 ろふ其角たふ愧て背汗して返ぬと今思ふふ

礼と諂と紛も安く言邁と象候と彷彿をり終
 乃者是をくくたすて氣象の高上たうく奉
 止ハ失礼を顧だし翁の細道は御湯殿山禪
 定の時乃紙縷加家加今に抄して掃劔増位山乃
 風舞堂ふあり是つこくれものよけ翁ハ佛頂禪
 降ハ嗣法の人かり志の控を何ぞかゝれ細控
 かりり控の心細く紙を討の小抄すて控も為流持
 わるれ控ハ其時小意ドを信よたいてそ礼節城
 志も流りざりけむりわぶるもな紙のりりる言降

うして其徳のうつくしく金高きものと云ふべし

万子蕉翁小初て對面の説

芭蕉翁元禄の以小國移御のころ万子はじめて
對面ありし時万子曰翁を諸國よ門人こらしく
其道の融通ハ事足らぬはくハ方外友と成
てあらずはく飛躍を志漢とて之の翁も是を
うらまき流ふと云んそこのバのわやまこと終
小校社乃坊が寤意を救ひあつハ緒國の行御
のわづと成る金城乃澄人を遊ばせけり乃

以て一人をぬきよとて之終ハ蓮二法眼も万子の
津と稱して我友と思ふありと獅子物難ふと
もく終ハ雅の海切と稱すくハれはあつ又蓮こ
房が本朝文鑑も翁の友よ万子素書ありし
とありせり世の人万子の蕉翁の門人十哲の下
して通を件六本死切より傳へたるを云ふは
その所つ大なる得りなりと云ふにせりて翁の友
と終つる古書よめりなり

岩踏く一目くのらくは 万子

訓詁世説卷之二

目録

万子蕉翁の書と乞説

大草蕉翁の墓と脩説

翁病中看病人の句と乞説

其角嵐雪が柔の句歎息の説

或人其角ふ巻の点と乞説

嵐雪が妻猫を愛する説

惟然坊布を埒る説

熟語世説卷之二

万子蕉翁の書と云説

芭蕉翁金城逗留の内連中發白短冊に徳め
り〜い〜らん万子の事なり只南無高来佛
の五字をて書て〜い宋窓本号とありけり
や家入翁の友とありんと〜れ〜り〜り
り〜け一隅を奉てあり〜り〜り

大草蕉翁の墓と信説

大州に芭蕉翁の墓ありて其の石に衣一鉢あり

まうけふ塵の浮世をいふくく風流の匠者かたが
の生前もいひて志厚くもやげなくせし人あり故
ふ籍乃減後ハ成りて子貞が家とよむ處もくく
そ西影をとていふくく時籍の墓へ詣て

か多路あや塚より外より伝むくく 大州

かくの歌をいふくくたつとぞ成ふけほの菴中に深く
菴に居て誹諧の外々世との定りをもくくつておひ
くくつてた其連中れくくつて誹諧
の席きんも又二三子もくく交りていふくくつて

かくた相くくつていふくく世はくくつて大州書て曰
そくくつて籍減後ハ世との風流流くくつて
二三子ふ交りても無用の事なりされど誹諧ゆかおく
世上一交くくつていふくく流りかかれて老の身ハ極く
成そのありたふ誹諧の時とくくつていふ交りゆあり其
外ハ名を使ひして何の用事くくつて一生かの交りも絶て
かりくくつていふくくつていふくくつていふくくつて
籍も頼母くくつていふくくつていふくくつていふくくつて

籍病中看病人の句を重説

芭蕉翁難波の病床よりやむ寂き終ふ時看病
の人くふ發白紙をこぼして曰今日よりしてこ
子の白く家々死後の作るうと也ふがう一故う一字
の相談をかふ海で皆々甚らねを考ふとの終ひ
る家人く赤くこむをそ終貴をつくくううら
大州の白く

うづくほれ茶藨の下れをさ式 大州

い白をうり出果よりと翁の終貴ありうる去来是
と笑て誠よく保時を山陰の終貴と求うはらう

のわく其誠よりすべ死ありとらう風雅の奥式
奈してくもくも大州の作をうるなみ又もあ
くく人も語らうとを蕉内ふ大州去来有い
和翁ふ人丸赤人ありうくくつら上を下をうくく死
作者るれどもやうに偏執なくよふとくくみさう
たう事道ふ堪能の志くく只人のおふはらうき風
流のふくしむる終貴くく又うくく死

有明くぬらう白く死きとく那 去来
おまうくくくくたきや香乃門全

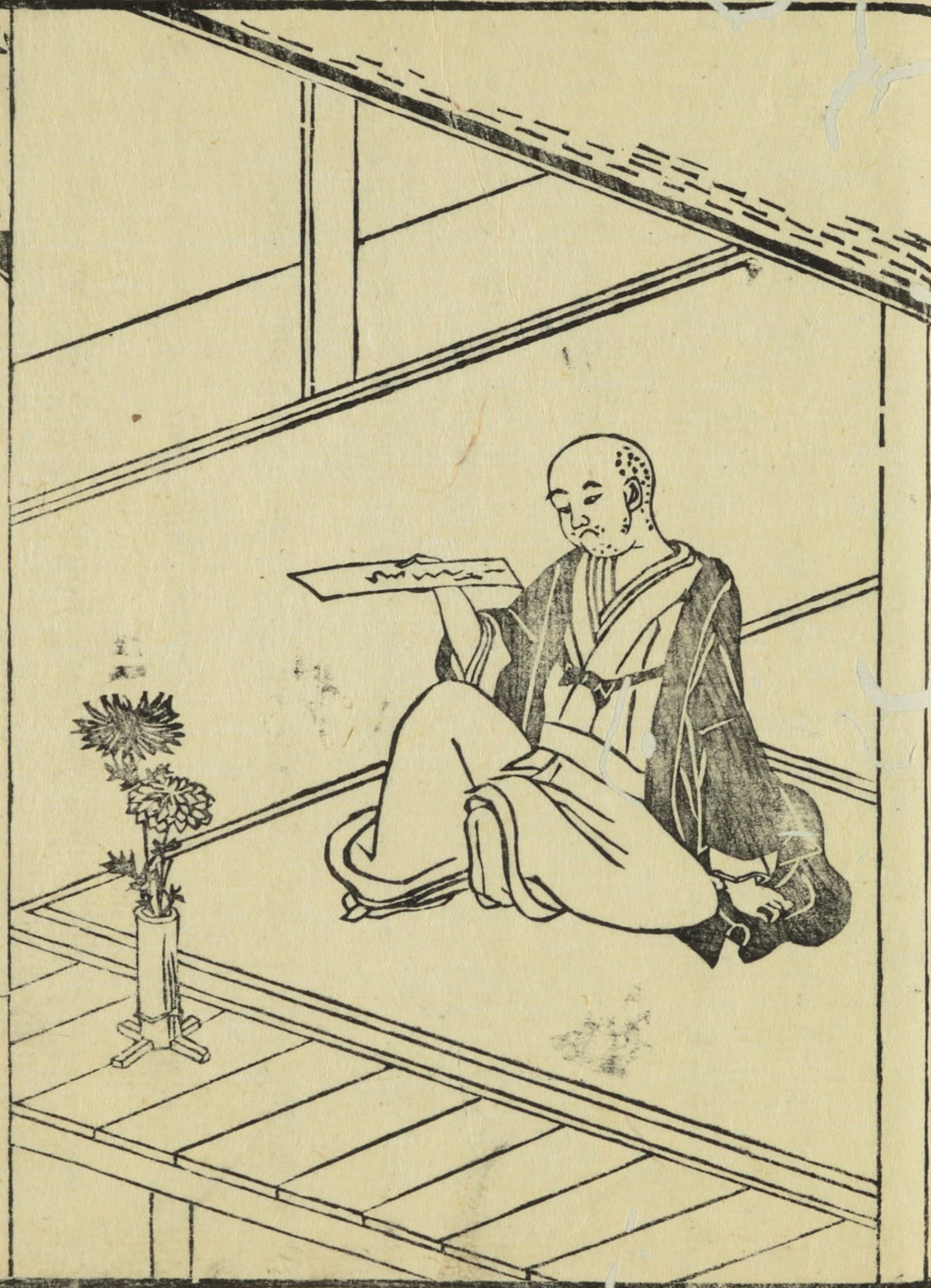
其角嵐雪が菊の白歎息の説

嵐雪あり年々重湯よ

賞の菊白菊その外乃名なきも外 嵐雪

とつちをまろり其角ぬく足を感じて云ふ家一生
け白よあざとさのもういふとを続らうして後其角
よ柔の發白を乞ものわねが公の

信きくや目ふたてつる塵もまゝの白つら嵐雪
らこの白と書て其角書と志てあはらうか
まの白はかざうとさり則そまゝの社中乃



倚翠亭所持の則卷が画よ其角が翁の志く集は
 白くゆりて横志了らるるに述き頃の回縁了り一灰塵と
 ありしに惜むべきに堪へりし人の心くさるるよ
 粧ん涼うらたれぬふらと其時をせりしよまの志を
 とうきまらるるもの折くよむきしうに今らう終るも
 系ハ類の人多き風の流のうらうら下りたる志う
 きんとうとくも歎うた事にあつてやうして
 せふと祝融神の災うて古人の書を考ふるゆとく
 うらに金減の塩屋にうらうらうらに蕉翁志遠の
 菴日記あり其文の小笈の銘り暮柳舎乃
 筆して

け翁菴屋ふ布と志が終る那

と其志うらうと終る終るも是もよらたの年
 火災うらうらて今ふ飛うと終るは終る終る暮柳
 舎らうらうらう原く是もうらうらうらうらうらうら
 志ふ志うらうらうらうらうらうらうらうらうら
 記行のところはうらうらうらうらうらうらうら
 し品がと志うらうら加賀へ傳ふ

或人其角は巻の点を乞説

あつ人其角が方一点取の一事ををりて其を
其物んうして其点とて其物もあつ其角是を
ひて一なるさうくくして使ひてつりやうけ
まわつたやう物んの事を経ばる附書と幣と
ふ及びど速申は先紫ふ点を乞登りと云う使を
是非よくとて事をとらけ其点料もひていふてん
やとつひりりふ其角う云点料をえ賀ふおと先
新るうとて其さうりりやうとぞさ其を角う平

生風流る事と人皆知りつるゆへに保るをさせ
とも新あつて貪もつとて人もちかくりてう風
雅ふねるま其角何をいふ小錢をむさばらんや
今の宗通教とる者の内うを徒もたぐ其志も
つやうしてみづらに吉人の海流ふ搬さんとて其
其さありま一たりの風雅と賣物として短冊
候を定めん点料は甲乙を定むるふら怒れたか
其角がくも其志あつて其徳あり故に貪も又
風流まり二三子く戒先はしめて其欲を治

の凡雅人と成ふ一穴賢塵俗よおらうたう能徳
賣とちう事やう積つう一負徳老人の連中老
人此高息よとある事をかたらうとらに老人

三結の糸より細き能徳よ点とらとらを考りた
としと積りつを連中のぬしよ

三結の糸より細き能徳よ点とらとらを考りた
と云う一して知いよとらとぞかろつる口か一きた
とつてとらとい出してはらに貪つとたのよ人あ一是
とらうたのふとらとらうつて平生のきよとら

ありつう一はう能徳をりてにを糊とらとらよ点料
と受る事も則儒師の束脩佛家の布設一同じく
是れつてたんと口腹をぬらんやたつむう此強者業
門をらとも外の業なく能徳のよとらとら今日業
とすらよもの料を定先て点を考とも又風流家の
一律をらよとらと其人よらよ其ふよとらとら料れ貴
族をわらら或らよを賣筆を商人の業化門
の風流者よとらとらとらとらとらとらとらとらとら
法圓を起めする事は是又修め此一を考ら故に

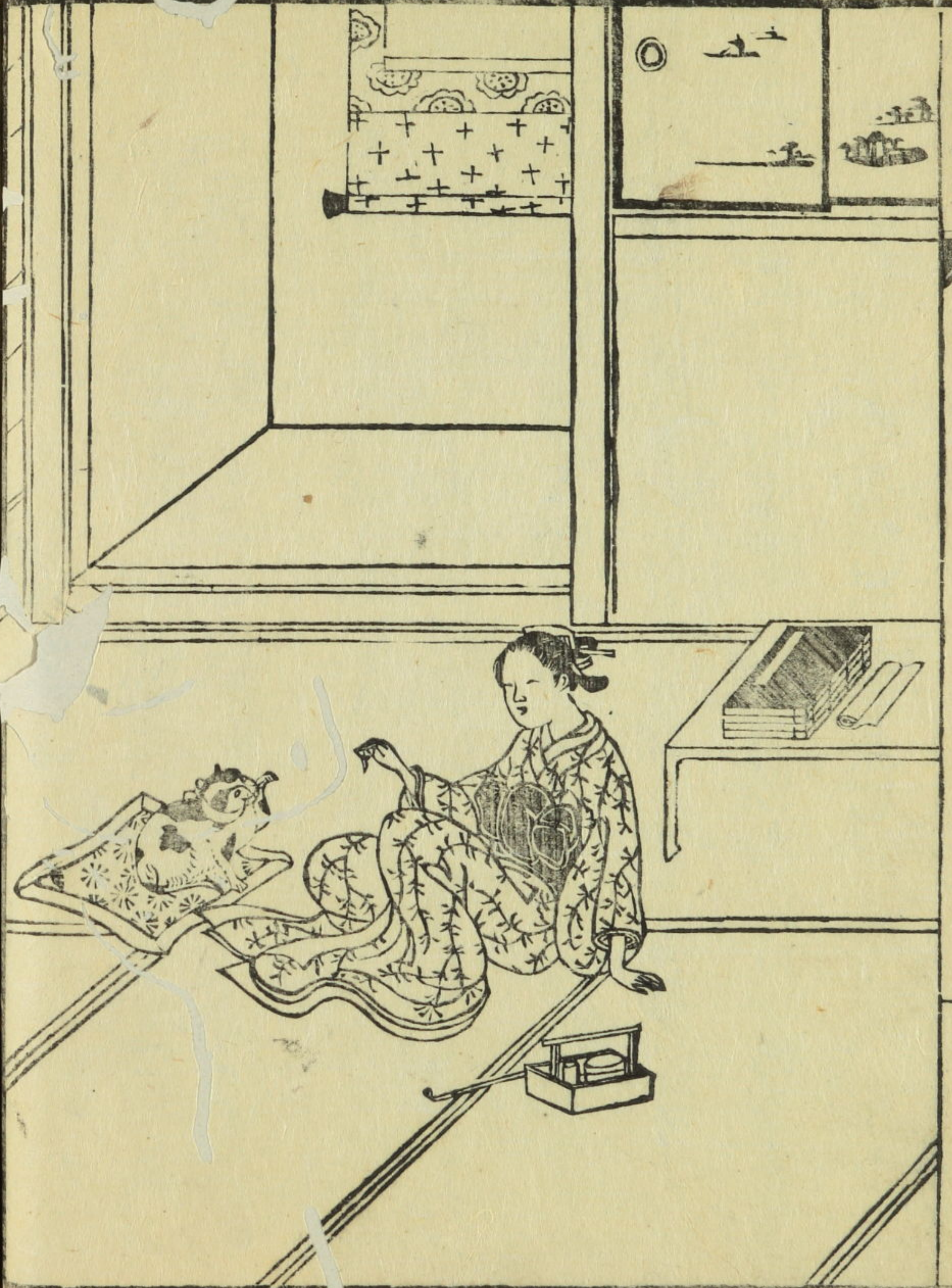
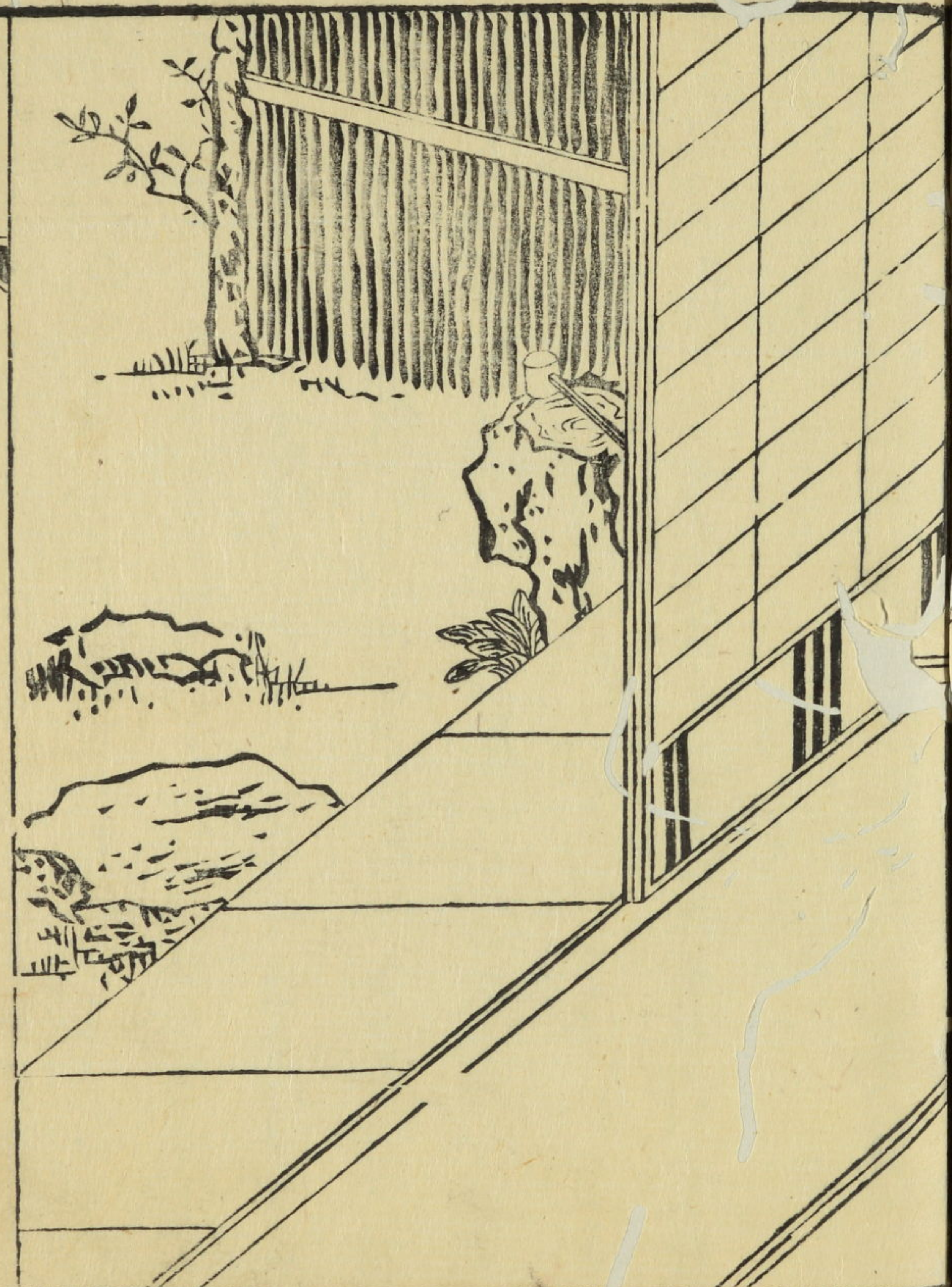
意翁も東海道の一筋をもえさるんハ風流の情
 けうとゆふんハ戒先を給つうさればそ初御す
 そのうちさむふ居く志をうけあふ六旬偏うし
 延世の管屋の巻私小短歌歌ありしう紅紙とく出
 て破づさむし蝟壺の底はししのぞれ小綱さけ柳が
 そとんさむひ糸うそまりしう紅紙染しむぞ皆
 風流のふうなり紙今時乃をとりたる流傳師を
 さゆその風情を志とふらあそあそいさるそ乃
 思那をやるごとく今年れ果旦連中ハさぞふ
 公程もさうなりたると口もいんもよ給ふやう
 すくふうずあうそ撰集紙すそ先板料をり
 先又も一宿紙をさ合るそなとそハ右紙を
 會うり人ハ内を後ぬとそとられても嘘ハ水紙
 耳ももつとそ只風人の襟り紙のそ何ハ紙ハ素
 門ハ高人足ハ紙の初御とそえさうう鶴とそ
 あうか人ハあう後星や俳諧ハ第一の傳受
 とのそ笑んも又ハなうずや

眠不寐よりく何をとるそ錢 其角

嵐雪う妻猫と愛とる説

嵐雪う妻うう孫このくら能を愛してううく
 ちうさうんを志うせ喰ものも常さぬ器よ入て
 朝夕もびも紙けるさでまけるは門人ともざら
 るともううさくも人もあうんと嵐雪おしくら
 歎を愛とるも程あうさ事かたり人もあうり
 たる物器喰物ととも忘るは日少も猫うう
 まま者紙喰とるなごううぬもさほぶやさ
 けれども妻志のびても早坂あうた免はげり

さうりる日書れううりるは留まの也さうん
 物ざらやういこの猫をほるはう係のううのうふ
 寝ささく者なく多く喰せうくれぐ綴ゆうさ
 さうやうれおとちて出おぬ岩雪かの孫とをうづ
 入まうともまう一妻をたごうりて猫とる事なを
 やめんとさういこの物一かちる不有う続はさうれ
 及紙るさう人うをううけるつま日あうさう
 先猫を尋ぬまうを孫こはううくおけりさう
 りれさうんさうこの物をまひけるやまううう



ると縁を切らぬにさだもぬけらひも志する程
 ありける旅のありくもあつんとせし縁を切らして
 さうなぞあてり終るも合ものもくろで思ふらふ
 たぐぬるらうにそ門口せどに二階までありつる
 つまらぬがまよりぬへ出ゆるやを隣をみるぬれも
 今いふとどとつ書はさけびてあましに方と
 もるぬれどもぬれぬとて日回さるぬれ書は
 城をむらうとぞう

猫乃書いりるゝ名のうりいり 書

ういしてこころあつく けりぬれだほよのな
 とすり隣家の内室是も猫をとらぬとらがぬ書が
 けりて化あへきける事紙書あひそふに書あふ
 つもそゆくと居ゆりなりむんをうとをぬらうや
 ならぬ紙々あつとせとぬく何所ゆらぬうに
 ほくしあつとつらぬれど書あつとゆれさへもや紙
 ぬくと猫を愛とらふ紙うやまうされらうぬ
 いふれをばうてのつとあつとあつとぬくぬくぬ
 かりぬ書もあつとぬれらううは是ぬるく実ふぬを

けりてきりたるん者ぞいふごとく解り化小異るる
 愛し極なりいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 ろいといふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 家門人ぞいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 瓜やうけ猫もいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 人くよいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

よ終らぶをえよや物もいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ 嵐雪

惟然坊布と得り説

惟然坊ハ音ふまゝ一御村有る西國行辨の時
 ろいん播員姫路の方いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 ろいようね僧の習ひ裾を結び肩をはるたういふ
 学物をいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 出くわいんたり惟然坊是城坊て杖杖ふうけいふ
 白紙旅店もいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 て給たれ紗いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 ろいんいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 新衣もいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 立うつていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

るり新しれよのいどこやうんわしりれいえの古をふ
恙くんぬふりたりたりとて居るのさびしと服
りの垢分るものよえく人ねをもうるえどおひ
ぬこふおひそく人もけいんく道人るるるを感
し物結るるたふとみりるごと

は水へみるるらし杜る 惟然

誄諧世説卷之三

目録

- 惟然は習家ふ一宿の説
- 惟然は誄諧の意と語説
- 秋の坊幻住菴に宿する説
- 蕉翁金城集會の説
- 秋の坊早稲米をおる説
- 秋の坊万子の炭をと説
- 許六命終の時お分の説

九龍嶽中歳旦の説

牧童素堂の勺物語の説

北枝如柳ふ酒を乞説

北枝家誂語の夜盗人の説

北枝家焼失の説

北枝雨中吟行の説

誂語七説卷之三

惟然坊僧家の一宿の説

惟然坊は長流の園を經廻ると時ある詠士のころころ
 やるる其のうらをたは妻をひらいてつらさかたおれうご
 ころとせんと振袖の小袖のころ衣柳ふけるころとれ
 たる朝こく家より下女をたふはひてふるる客僧はこく
 かりたりとこくしてやうたあまらるる候とてあつた
 衣柳ふける家の小袖のころ衣柳ふけるころとれ
 たるそのふとせとまうりてあつたかくと若るふあし

の曰惟然城の中へ登るごとくも小登の儀ありて
去りし酒客の存人されば朝の露を渡りてたれんや此
小神成りて往きぬるものもあはれさ終に教おれ物
ころの好日こそこゝれ風士のうらみありんかごとく
ぬまの先終るべしとてさうとやがて坊の終るこ
ろのべのうへ供りてぬはうとていふ家も惟然城を
家よ寄てそとに其のうらみ今おとく立出する
に世風の身ありて甚きうらみおよ立ぬりて衣
折ふ者も小神をいふとていふよあはれ末きりえ

うら小神なるものありてこれとも男女の扱のりうら
見へど定て是ともやめんと被振神とて伊達
換振の小神をいふとて其供りぬりたりとて
ぬり人家ともいふとていふ風家の住者といふ

惟然坊誹諧の意を語説

惟然坊誹諧は伊達に依りておとすべしとて
の席におとすべしとて居たりたりとあり人云け程に
何とて詭諧れ交りたれはさる今言作ら亭とて詭
諧のりごとくおとすべしとてたれを坊おとすべし

と申すは、その人の子孫の誅詔降り、これに自か
て記さし、今日、休ふ喫茶、陰坂、行住、座臥とも、いかに
純徳なり、それを外ふ純徳、世と、いへるも、ぞや、根乃
る、純徳と、者と、替りたる人、よこそ、すまじき、業と、いふ
つ、これ、れ、が、ま、く、思、秘、ら、思、歎、と、く、久、り、つ、る、と、い

秋の切幻住房ふ宿する説

秋の坊々令城了名、これ、風流徳化、れた、臣、志、え
祖、寂、湖、あ、れ、幻、住、養、に、あ、つ、つ、時、に、あ、布、ら、故、の、小
さ、れ、と、記、さ、り、つ、の、終、つ、て、一、夜、に、お、く、寝、を、し

い、寂、流、遁、老、の、身、れ、う、の、り、無、常、迅、速、に、戒、る、と
い、く、懸、く、物、語、何、り、禁、ま、ど、え、送、り、終、つ、く

や、ど、く、お、ぬ、ま、り、れ、ら、ん、く、す、學、乃、ま、芭、蕉

と、一、句、れ、教、悔、あ、り、も、い、け、時、の、ら、ん、く、を

蕉翁令城集會の説

令城を小枝と秋の坊といふ、これ、は、これ、の、時、に、
あ、ら、う、に、獨、居、強、首、れ、あ、つ、つ、い、は、ど、も、の、心、に、中
つ、た、や、う、に、も、く、つ、く、ふ、祖、寂、知、道、の、知、の、と、れ
令、城、よ、志、づ、く、枝、を、休、え、居、い、小、枝、な、ら、ん、も、對

西のり〜ふゆの中お〜たれいけり紙由枝より秋
 け切へ露びりりもあどまり〜く〜して秋の切ける紙
 まゆ〜と〜だ蕉翁の庵〜う〜はうりて對面と遠
 くれともお小れニあくる事と〜あ〜情うり〜く〜を
 小枝秋の切曾良など翁〜らともい念〜たる序
 とも其語日に小枝とら一向物〜ぞりりける紙翁と
 り〜し〜けり〜く切ぐ字象と稱〜けり〜らと〜ぞ

秋の坊令終の説

秋の切乃令終を正月四日さう〜と〜ぞを日友とせ



孝東より春坊の席上訪ひ来り候に云ある乃
侯旬旬して後遠因坊曰紙曆作らるるは

正内四日よ後門に紙をたより 秋坊

と口をさむうと云くしうらむとて息深く
孝東驚あつち中にもけ坊のほびぐ自己を忘
ゆるうまひたかんど感涙ふ涙をぬぐやう

い紙はむと云く久けり秋の坊 孝東

と云あぬ一ふ紙を向てこのこく葉にけりぞ

秋の坊早稲米とある説

秋の坊ある年秋友どつううらうれあつたの
日早稲米粥してまらうせんぬぐぬぬと後り給と
約束り其日いさうて北校徒吾小壽向空さうと
らひ切の席あきるに坊はうらむぬんをれど
日くく秋まうきうらまうら坊のあてぬり
をりあく約をたえて他よあれきる紙婚の
るん坊は曰其るゆき家孝東といふもの早稲米
をりぬぬを約束せしが彼は老ぬさうにお還ら
あやうといふ冬を紙給と云孝東より是と強

らばそれと其物とを交すべしと思ふれぬのあらざる故に
 しくよりして所中とを交すべしと思ふべしと云ふは猶も
 おもたれぬふりぬの當分のよからしむるや後よと
 とをかくは通るべしと思ふべしと思ふべしと思ふ
 東より誠と云ふべしと思ふべしと思ふべしと思ふ
 さると同なる時何日あるべしと思ふべしと思ふ
 なるべしと思ふべしと思ふべしと思ふべしと思ふ
 もぬをあらくして思ふべしと思ふべしと思ふ

秋の坊万子にゆきをを説

秋は京師に柱びぬりちちおて今もや雪はうて
 指ぬもふと名一柱れおを氣とちのぐとて
 なしより万子れぬ人炭をとて

きとれぬふり下とて思ふべしと思ふべしと思ふ
 とやきりぬを万子けちぬ炭の字は後で説
 るりと思ふ

きとれぬふり下炭をよおちぬ人と思ふ
 とぬを成とて別炭を思ふべしと思ふ
 ちりしぬは炭のほぬ外とやらしんまは秋の坊れ

流借介一よ

やれとては戻のほいふ西白一かあけゆるら
か
やうの風流まで流借介れ父母なり一秋の切ふて云
風流人々やことしの貧乏なり一死後ふ米銭をとり
たつらる目もき一とよとれらる其細ふそらり流借の
死後ふあつて一粒一銭の流借のいふとてさうさ
とてふ流流家のくさる一

許六命終の時お方の説

許六々老松の老き武門をたぬる蕉翁日画を

取て師と一俳諧にやして弟子とてこの流ひり
流ふ丹青の妙をゆさう一生家ガキと自負して流を
菊物とては素傑の修行者なりたう翁の後中
へ是時をぬて入一とていふ家なりとさうあるい命終
らんとする時の介一

今さへはらひがぬぞとていふはとも死後とてさうい

ると老後とて流借をゆさうを介自負れあつは一自
撰の風俗文選の篇実韻寒字流法師の流借はく
たり今のさうも自負するものいふとてさうい

象浴よりもく人成るゝと象とを志むるも成
 宗とするは終るあゝぬ道なきとゆるふ年ふに
 ちるふいふ力おとしく自負れはちるを却て諸人乃
 多しものもぬたごりかきうらふいふ海さし辨士の
 自負いたらうすむくぬ流より出て終り風流と忘
 まん故了始もさく終りもさく宛轉する環の如く
 成るあゝくぞの自負も又風流なり

元兆御中歳旦の説

元兆とありと金城の産うて洛へ住り醫業成るとて
 昔よりとる嘗て衆者人うきくみ其は遠東成
 うりして御中元年成りしけるふそめり御年中引て
 猪乃首れはくまよ花の春 元兆
 陽空のまもあつたぬとて
 ると笑りるふは人候をせとさだとてし事なり
 めてあふあやゆりなれしつれたとて海に経る
 累縁の中成あゝくさびほびの眉とむしあつた
 ちさけは女成あゝゆりこのさびとらけらるや果ら
 亡名してあゝ志れどるりやあそぞ

牧童煮堂の句物語の説

扱をハ北校が見てて才能をあらそひて対する同
 絶のあら終としていとのびかき冬の人のかんとも人
 くふをさう教昔々歌波を歌梅翁の酒を志
 たい及煮翁の口へ入て翁も扱をいふにそのまうと
 巻ぬい一かこのこなり生涯眠る紙のくけまのそんち
 以云象じう一芭蕉の翁うゆんて武の煮堂り
 浮葉をよふ蓮風情ささくんとつふれ物語ふ
 乃人翁の日は白らけ蓮と音うとさう人うらうらうとせ

糸一結つゝ其外をゆるも翁をばとるんよきそや
 までの人ふこころ始ぬるも底うらう知うらやうに
 してふ一ゆるふ今日の人情あうと扱をいふてたかく
 してあうふを扱をうらうとてさうた事ゆふそ言
 子習ふを傳うかこの翁くもけけらうの海
 先はうらうとや

採りうらう一月とて出まあうらうち 牧童
 うらうら名うらう一人うらう

北校如柳の酒を乞説

淋瀝世鏡
卷三



淋瀝世鏡
卷三

金城乃北枝の古き蕉翁の門人ありしと云ふ
如柳と朝と暮とをいふ如柳の酒を賣るといふ
と云ふ枝の如く嗜むなり日毎彼を訊く
酒を呑脱籍が塩造の旬旬の風流を流す
彼酒家初の程をその終日おぼゆるは後
へかへうんごらきんといふはなほその
風情をうらみある時小枝ありて酒を呑く
如くあるの心細く思ふはなほがもつ
志をくして小枝を家の下女にぬる味もや
百々の下女又酒の如き人と合点して
くは小枝の口をくして酒の如きと
の如柳も後をかして大衆に流す
くはと云ふ

夏 沼や家とのりり火乃車 北枝

北枝家誹諧夜這人の説

小枝の家を誹諧ありし時夜更に盗人入りし
けと云ふりの小枝に若くは小枝歩笑ひく
様をこころ出ださしものさりとされし

北枝家誹諧

十一

之び居りて小皆移ちりて其席を居りては
世りしれし一茶釜らんく

とよおる白出りし小枝をわんぐ

ぬそ人の目うけらる目うけはよ 小枝

と身より此白をまきと富米と思ふ屋いとま
ころ人もあはれど是れはうら降りの明りて目うけ
らぬくの白小枝しりしりしとま

小枝家焼失の説

元禄年中金成り比賣の憂ありて居るに
中野とある小枝の家は昨烟小失いしを友とら
つてとまらるりしとま

焼よりけりしはれども花を散らし 小枝

かくはとまらるりし悟然自若たり是人世のさるる
あまら川の常なる事とよくあしきり風土かれと
と人皆其厚德とんりしれども其後又北枝家罷
小進りしりし従吾くさるりしりしれりてむりしれり
情しりしりしとまらるりし

ゆりしりしれりしとまらるりしりしれりてむりしれり

従吾

五

小枝

のりたふ祝もまほひしむらひのまほひかへのほほ
うゝれ申も清き言を志まじげに常く風の流も度
て知るべきさるのふらと

け時の白う家え音とらふ集なり略してたふ記を

焼よりりたれも花ららうとまほひとら

北枝雅兄がむの言情きう

やまふりりしむとも様さうぬうら 東花坊

梅うもや先一書り一見舞一 牧幸

雪もまほえくめう終小倉のや後北枝

雪清うのくそ

こゝ楳の伝候うる水鏡りか 全

墨ととれや卯の花の時 従吾

坂紙紙人のまほまう杖窓く 支考

さう仙あり

北枝雨中吟行の説

あけ年春の雨降てをぐて晴なるふ小枝松並
あまうくうくむわの道うそり合るまのうく

ハワリ給ふと同り給ふの發白もいひあつてさうや
そふられに我もいひあつてさうや

豎白紙かき人ねりり村のふ 北枝

俳諧世説卷之四

目録

- 北枝蕉翁の妻と信長 風死堂の説
- 乙川白と殘家とのお説
- 東死坊禪室と於俳道入説
- 交考長崎逗島の説
- 交考巴静素名同和の説
- 涼菟死と尋肥前よ至説
- 涼菟辭世の説

俳諧世説

目録

俗化蕉翁小作身これ依と結説

尼智月蕉翁小形見をと説

北枝舎羅と吊説

舎羅和盜小逸説

李東白を吟し家と去説

白空蕉翁と号む説

或人麦林よ白の姿と同説

麦林莊里に通説

談諧世説卷之四

北枝蕉翁小叢と傳是風經堂の説

芭蕉翁小圃行狝の時小枝の案内とて野田のふか
とてふ所をあたひのりた給ふ小枝をけりてまとい
いりて物さりと翁小形はひりてに翁そとを採
り給ひてこれぞとて一印給ふ其時小枝のふか
翁とて叔存けりてまといひたり 小枝
をうれる具雖も又一格なりとてさうり又其さう
翁と菅葉を採りて

志々居もほくわく兼の初米也 小枝
け兼惟然城附鷹一掃刃始信子山一傳り其れ
子寒瓜増位ととくふく風経堂といふををを
ほもの瓜納む

二川と致家と考説

二川と致中篇六の巻少くともその古守れ家
ふはく一そのあり一がたふいゆふ致信とんり
を致して居るらあ〜ひもくはけるをき〜故ふ
〜くもけ人を少くお〜こ〜んか其の湯な〜て

其是を羈ととけ〜いありと〜く係り賢
致城そのふ下ら青入道と〜りて其國とまをと
系〜も係人〜ひ〜く〜き 二川

かく致家れ清子小枝一む〜形り致ふを人ら
め〜よりけものを信ま〜り〜控バ〜あ〜る〜答〜んも
〜く〜吸〜扇〜して〜強者と〜る〜一〜別〜ち〜安〜山〜の〜う〜ら〜れ
紫のい〜ち〜り〜と〜む〜と〜び〜て〜一〜せ〜紙〜す〜ら〜り〜〜り〜家〜と〜ぞ

東花坊禅室を捨誂道入説

東花坊を考ら〜ん〜は〜の〜産〜少〜く〜て〜初〜め〜は〜禅室

へく法藏司とらりみ年此らる

吹毛劔也春三月

腸断牡丹花下風

とく偈成依りて宗門乃くくも末頼とく
思れ一才傍り東都とくもつる守れ大會に
巖に溝とにハヶ条の回を揚て難凍をそれり
法養其才とくみ出せのさつりとさり一
採撰をくらぬくむさうに傍りくさる
水さうまうりて紳字成好も伊勢さる

とくく先く山田わさうに身をよせぬらみ控
つらとく風家もさうみ交り其因に涼菟
さうむらさくく其英氣小感一其才成情
こ涼菟を初先後とく洩潜をすめて終り蕉
翁の門人といさぬ果して其才ひさし
葛れ松原を述初り續五論と撰一杉御を東
死西死のあ集ふ名さく実と編必や荆棘と切
もつれ天下に正風の道成を今にさうても
海の道を第國ふとぬさけハ年とくふ交考の

大功といふく彼の伊勢を神学に推すはも
 つまづ俗形を之ぞ俗神を守りて居るなり然るに
 小運二坊となりて、肉含るもの放縱も取りける紙
 衣系法師是戒をてとて、墜落せし来世為ど
 牛にるるくといひ、るふ支考のあつて

牛にかね合息どや 躬履夕涼 支考

支考長崎逗留の説

支考西花切と号し、西武行脚の、長崎に留り
 杖とてむそこの外七といふ能士ありり、と云う長

崎を變船往來の港を官人の口たつた、商
 賈の後も、舞臺を好むとの、外七、中華の洒落を
 效ふ、外七が社中、六通譯の官人も、あまの、ハツと
 るく、唐音、舞臺を、と云う、中、い、る、り、て、風
 流の、形、さ、も、の、も、多、う、り、あ、る、時、舞、席、終、て、皆、
 ぼ、ろ、し、と、す、る、時、西、花、坊、を、ば、さ、る、人、ふ、向、ひ、そ、ふ、の
 手、ヤ、ウ、チ、と、を、給、り、る、べ、し、と、い、ふ、れ、り、れ、は、皆、く、
 ひ、ら、り、て、其、ほ、は、舞、音、紙、唱、る、者、と、の、づ、ら、怪、り
 て、其、り、は、身、に、止、ぬ、と、ぞ、後、ふ、面、白、れ、あ、つ、て、い、と、云、へ、

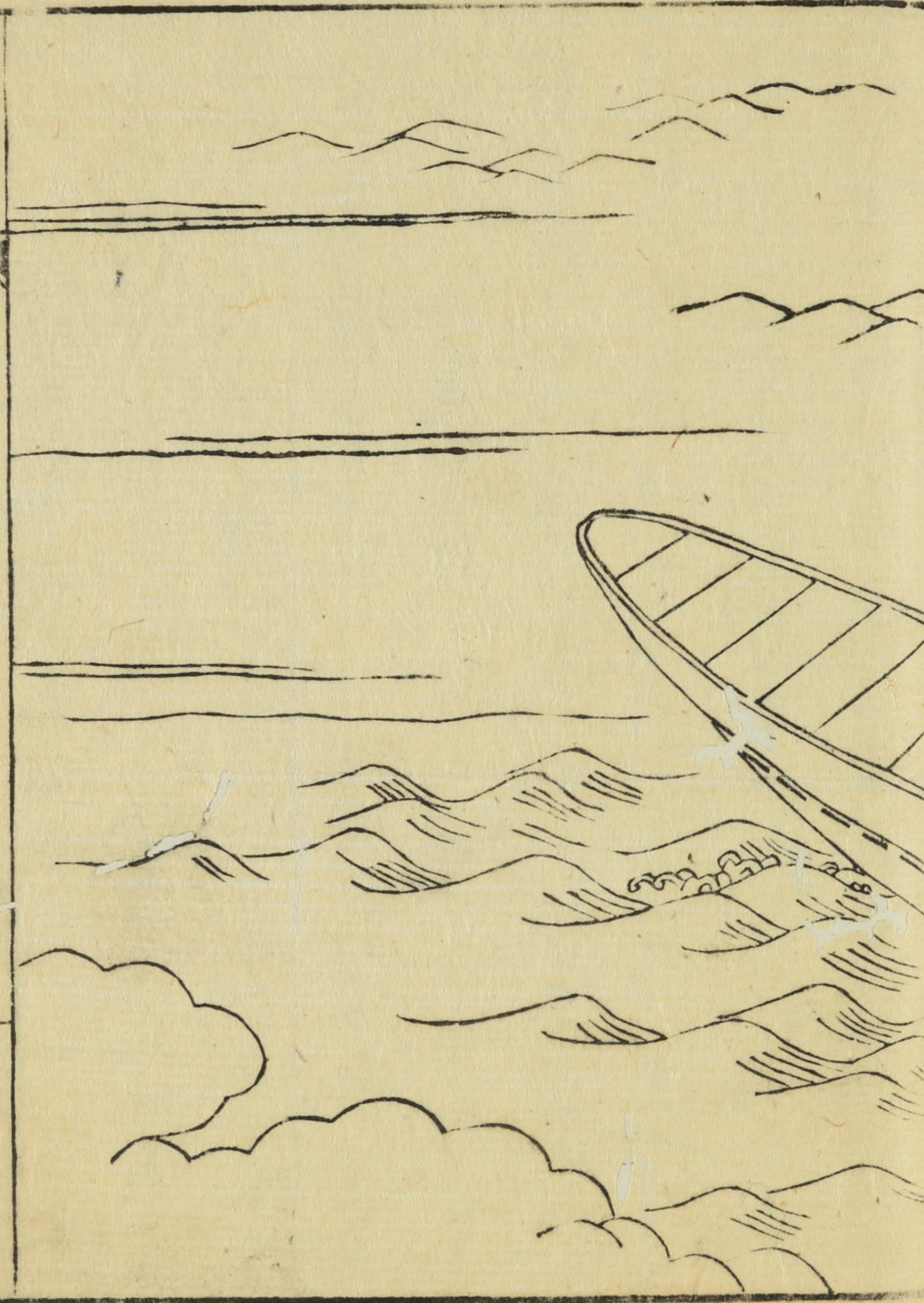
支考巴静素名同船の説

支考甚二房と云々名しては尻張の巴静と云ら
 つま伊勢に因へゆらとて素名の渡糸に糸結りぬ
 以て去もきささるるしんをふいせご家白う雪
 弓れうのいすんを被草に糸より雲雀の草鳴た
 糸を写く糸もまやうに洋くたるは白青を貴
 了たる素笑もといと奥の糸日るりきり巴静切り
 背試を結く云やうい風系糸を糸くこいんや糸ハ
 くハ二白りんくと回ふ切やくふ機娘ある紙つこくそ昔子

へらしく風雅ふ志あるものとお母しく思ふか
 の詞を更て其風流をえ為しはとてつる也静んね
 とお其らうしたるゆゑお坊の回吉人も糸よき
 てハ唾にとつるやうに風系十ふきやそハ發白の
 出りのふあゝだも一け糸よ發白とんと思つたの
 以真をうく胸中にきくみをくく之を今昔何方
 ともあ終今うお糸く糸よとてそこの巨煙ふ葡萄
 してね白成案はなうと云うとそを機り其をを結
 けするもの胸中ふ糸結乃けり糸あてする抱きうけし

支考甚二房

東海道志



東海道志



涼菘花を尋ねる小至説

涼菘花を伊勢ふとある能士とて其の白くハ涼菘花白
集めてあるよの喜つてつらう花をくんとてあり
そんふ草履をきいて出で二三日あつぱり一丸ふ草履内
とてあやしみ思ひその花のりこそ人へてあるのぞ
ふあゝそのふ屋うけ花をそんく京都を東山のけ
しを思ひあはれまゝに思ふのゝやこやけ思ふ
らんとそふ草履をきいてた京師の定宿へ使とて
あゝそのつらうなふたは實に思ふは思ふは思ふ

の操悪しきを物語りありて頃々寺人や新羅の
らんとつらうを思ふつらうとて花をりて思て思を思ふ
の思ふ草履をきいてた京師の定宿へ使とて
あゝそのつらうなふたは實に思ふは思ふは思ふ

涼菘解世の説

涼菘花馬の宿中にあつた維久れ枕頭ふは
その思ふつらう今や思ふと思ふつらう門人解世つら
と思ふつらうの下に思ふつらう思ふつらう

合点トヤ其噴乃ほつらう 涼菘

と交ゆりておくむと云ふに長深きなりけりゆいその人の
 のましくありたるゆゑもけり此曉のまこと口ん
 うたむと妻林更り相説ありしと知るもるもこれら
 てみごうくふく多終は甚ふしれこ紙をくもを
 よう其病を痛症とて病中詠も

涼菴

今をいんがぬわくとおひに紙をけしこのは合
 うやう風流も笑ひゆ

信化蕉翁不除芥の儀と結説

信化の誠中舟波り名ありの浄土と云ふ字のたぢふ

住し終り風新う志あつて一生れ白とあつて白扇
 葉といふ有り一とせ蕉翁の風新とあつていふあり
 扱むとらふ落柿舎とて翁をむく除芥は盃酒と
 くむけ事成其角が砥波山集も記していふこりれ
 同むくくそぬまは予もくこりぬぬは砥波とていふ
 か入まへし葉巻れ更や雄と川 信化
 尼智月蕉翁不除えと云説

智月の如大津の乙州が母とて母子たふ風新に
 扱ひく蕉翁と除とてあつて翁と對面の序とて紙

も後く登れおさしりて終る紙幣に茶のく
焼てふくやんと云ふ小枝をぐてこく是を捺し以
やく茶に合けりやあらし舎羅云其茶をて伊人の
口紙をぐて一ちう紙は後うく紙を以てあし
と云ふ小枝をのれをうく其紙流のせうく
たうゆ紙をて入紙をて立ゆりぬとぞ

舎羅歌並ふ遠説

元禄十三年の句空草菴集といふ雑書と撰す
其は書此以舎羅の文をよ

さうくさあしに吟してゆりては
あふ歌並入をりててあつれものども
いとたさく入るる登れあもつて
る記考をてはしと大盜をる中に
んうけたるやをぬくぞ

ぬと人もほがらうやう然 舟 舎羅
と吟して寝るに惟然地と居るか
ぬとゆきてよ柄とぬととあつと
惟然

李東白を吟し歌を去説



李東ハ金城ノ十村 化居ノハ
大倉屋ト云 入村役トシト
々々々ノト常ニ風流ヲ好ミ
流俗ヲ鞠ナシ
高ト云テ古ノ官ハ俗
おろそかニシテ
上ルルノ風流ニ
入ルル者トシテ
其門ノ冠ヲ抑ク
立去ル

高ト云テ吟咏大
知トシテ出ぬ
誠ニ鐵心賢
固ノ風人トシテ

向空蕉翁を尊じ説

のり時麦林の菴子案内して入るる人あり彼
 が云家徳徳を喜びしれをのれども其法其惑
 どむらうに徳にそく徳る去るがうそ徳る
 下悪もうらぐと物と富るん師の云其道ふ志
 云人のバさのむらうに徳するいと善人彼もの又
 云發句はうやうれしむと徳るもいと同師れ云
 目れおのりゆと云とさうと善人徳る彼もの又いよ
 ととそち意をばさうらけいバ一句徳りてふさうせ
 ととバ女徳るさうととあさうとと徳る徳るよ
 うと冬もすうやうらうらい徳るおのころいそ
 ちふ徳るけり徳を徳るいとあ徳る徳る
 句のとがうらうと

百姓乃徳るげりさむさふ 麦林

と云ふうらうらうらうらうらうらうらうら
 序上何と云流義ふ百勸了馬をいらくと定ん
 何くれま娘ひさうやうやとあさうとと徳る
 一の麦林の善よ云ぬはらうはるま徳る
 やうれり徳るうらうらうらうらうらうら

おもしろく見送りとすれりるもぞいあはれ細心の
無用をこぼさそけ行の道通を行へし清浄者れ
悉造なりし

麦林栴里の通説

麦林知命は年を起て栴古市なるの栴子なりし
門人春波が夢傳く中り老後の樂しみを外に
何程もあらずし志うれを栴里れ奥を好むは化
の笑ふさくさくぬるるり然いふんあらしと云
す麦原を家ら何門くわくは流階師之人の形ら

老ぬまばり他もとの川くさ古び竹もとのありある
を折く栴里ふ交りては奥ををる時ををのけく
先の原情と忘る三弦の中りし句紙書とるる
とぞく竹もは其変化は後もびんのかくする事
なり家ち流階のありふ其志成書ふとのこり
身終るやぞ折く栴里子ぬい竹もとも姣女
と栴ををるるるもなく只其席を何の奥と感
て一生樂しむけりしとぞう終る栴里れ交りハ老の身
も落入やとく栴久がぞれを合の傳名をるが

くらしみせし終りふさしりもなけし故いさく
 り親いれ青樓をえりるや塗炭のたぐく姉婦を呼
 て禽獸とすものい甚於しもの魚さある豈に
 郭姓女よ眾あらしや人冬能人を活しゆくを教
 とハ用ありし終り麦林師の遊びやく用ゆる
 人といふなり然るに其ををまとも其初ひをえり
 ありしを評をさるるさしとゆきていひあさるぬさ
 春波の物さうとまのりさうまぬ終り女れ終り
 水仙やまのりらるぬぬれぬ終り
 麦林

俳諧世説卷之五

目録

- 路通蕉翁の勳氣と受在鬼貫が説
- 杉風無季の句と吟どる説
- 越人旧懐の句と吟どる説 (誤傳)
- 若原花女奥州が説 (誤傳)
- 梅貞の句蕉翁一見の説
- 北枝従吾が命終を説説
- 風國集の題号と説説

誹謗世説 卷之五

路通蕉翁の勘氣と受其鬼母分説

路通ちりくりあり者さうらうらうも時放蕩の如く
 既く人の下ふふり外々くくを祖翁の懐くく
 かつびきりあつてゆき後く又翁の志よた
 がいゝ志ざくく作身の義と認め終るも翁の終焉
 ちうれ程よ其涙をゆき終内くくハ昔のりくく
 ちうらうれくくけるも路通ち芭蕉翁行状記よち終
 のちちくくば翁ちる宿下の世水への文存も亦

路を事ハ大坂とて還俗してと教のゆる被推
量んそ志そ事以あしとん久ま言るゆにハる落く
ふたゞんとそも酒如能因の中子ハ被教後く
久む平生の人あてハ常の人ケ老のゆをあはし
何の不實うほ産あるくや拙志あ地ゆくハる無
仕すくハ信りし教んてありとも風雅の志をみ
ふ成らんハむくの念より後よりハるハ

二月十八日

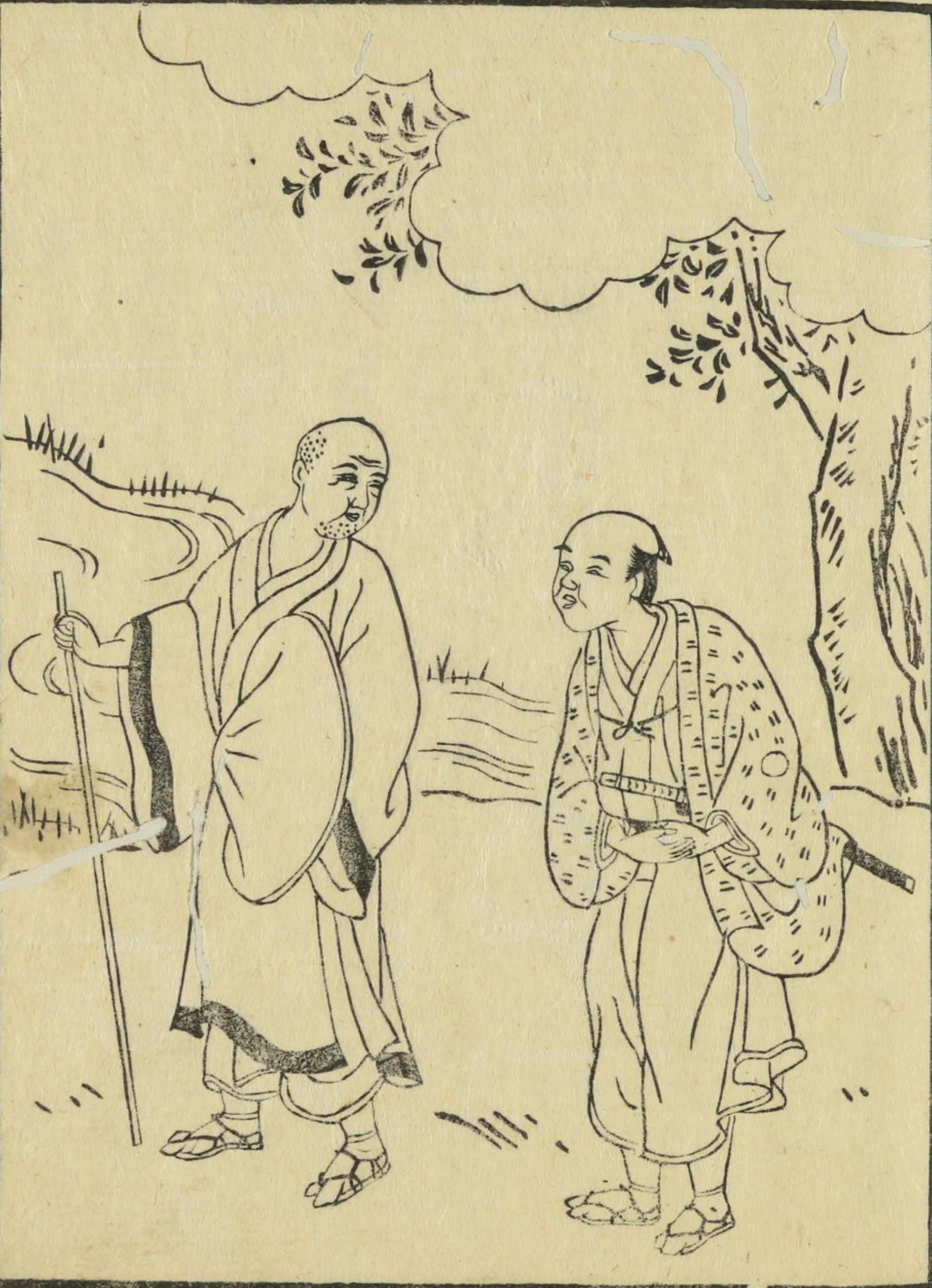
そを成

世水換

くやうのたしともありて其罪を赦さるるゆり
ぐんぐん故う翁終焉の初も後もそやハる
撰所のくくとたふ後の追綴このくくハる
事如御記ハ祥るうあう教をあるまハ湖南
の義仲守ハ翁の追善法會中ハ時路通大津の
侯者紙海ひてそ席を傍きハ船ぐハるハ
ハ紅妾供ハて古人を罪もハ乃智堂振舌のハ
ハハハハハハ路通思貫がハハハハ紙を
是と情ハ冠貫ハハハハハハハハハハハハ

路通思貫

ちる書ありたる遊多う鬼貫々蕉風よりは
 とくとも其以伊丹の鬼貫と人の好もてし
 たる賢をれ隠るるう流よをうとあり一
 高教のおいこのまを嫌とぬ人ありは鬼貫が
 く我を守りては是は守りてはかくまが風流の人た
 らぬ水その中へ流るるを望よらるるはるるよ
 とやまへて路通かには者之信とて風流の人對
 けぬ巧を紙借しんかぬるをうたう人の志は
 守部るるは成るるをう古書に曰詩の志をいふと



魂借ふをいそも又私さしんや

翁のけし折をいみるまをちひさく

目子なるや海きくく小の秋 路通

敦賀しそつらさるる

あさきものとき終むさき 神送 鬼貫

秋風無季れを吟とる説

秋風を東武了庵して翁の東行旅しんくはく
く志をけくたる言すさるりしる翁の

古沈や極飛らむ水の音 芭蕉

と名をけりも別ち秋風が別墅涼川と回城と
しん系の家してのさうして其古沈は今のさうて
沈とさるぬ一とせ翁のけし折を匡うをさる涼
く胸にせぬる送別れ白子

何となくそ吹ぬもあをんをり 秋風

く無季れ白吟たるも是もふは成りくを
しんをのづく其情の白と秋をさるをさる
のけし折もあをんをりしんを成りくを
序に素堂の白吟たるもあをんをり

俳諧世説
巻五



言言七説
巻五



是も君子の戒むる所なれと又玉の卮のそよ
るも風情もうたへしはも端をたしてそのやと
うねを知るとも識了風流の人と云ひて入るやと

△吉原社女奥州の説

奥州と其降らるる好くは東都吉原の社女
うして蕉翁のせふ風流の稱をば撰集しも發
句或加入を添くうめは時じりしうくうたる
人うかゝと云ふ者ありて勢ももきこるる
ととる時奥州いふ或涼くあるはく

意死あを家ら海く 鳴る郭と 奥州

といはるるは後子にほせり休紫のかきありと
ぞ一其字よと

かひこより思ひしもよ休紫れらる斗好る類と云

かきも勢りたる人のなんくなりけふとれよみは
うらゝりれをなう

梅貞の句蕉翁一見の説

梅貞らば新思ふの春うらむとワレより梅結を
このも十七やれはさし

山寺や只のほくくうこま 梅真

蕉翁山小移柳の投京とては句紙をそしせりふふ
之ド終ふとて其後翁移柳く近化ありーゆき
此小翁の電覽は磨をうけあしとて好く

行ふりて水とをせりり杜る 全

とくくをしくく〜移を〜れりあが〜や
あ〜く〜て其泉れ移ふ移さ移府也風神の近人と
是の〜ハ強くべれのも〜れものあ〜や

北枝徒吾が命終を歎説

徒吾ら小枝が門人うては一日も相をせさるる
あ〜かして徒吾病れ床へ移るるもと〜り日毎ふ
交りうたるなるまバと小枝みゆも好く〜ん
湯粥れ移婦と〜り終る泉と〜く〜終うら病ひ
目〜にきりりや治療の術を〜つと〜く〜を〜ら
は〜ふ病家と作を〜ら〜ら〜ものら朋友の位
と〜ら〜と〜も〜りに〜し〜屋さ〜け〜も〜ら〜り〜と〜ぞ
く〜て徒吾命終らぬと〜は小枝あ〜て〜ま〜り〜蹟室ふ
入〜其抜をたき徒吾く〜と〜す〜と〜汁の〜て〜其位

ち大受紙として泣けを修立てゆらぬおれをそし
 人もけりくとて笑してぬらひに抄たへら終し小字を
 其ふもよ坊通しよれ故き紙とてとて修友の
 交り修する紙ありし小枝が物物を修員あつた
 として

風圃集の題号と誤説

洛の風圃と蕉門と一方とをのむをさかのとちち
 していつとてきく自己れきぬらうり物取集のぶら
 うらうら書紙ありて併たが讀み紙うけ風圃の
 名紙下しをたひ己う其れ産をそとてけりるや

あら初蝶柔の香二集の題号紙あやまらして世の
 人の筆下れ紙士のやうにそんも

二日月乃秋をそらふやまれば風圃

とりうら其けの人は及うた一節を抄さ
 ことらぶしうる紙士のつらうから麻をうらそ
 名を筆下れきりたるも撰集の心を周ひされり
 わやまらけりて情しきるよあはれや今のそも
 初めよを師れ物修り紙あつて平紙一ちり
 其名を發したるが次乃古人のけり紙とて

三草紙

白紙

志五紙

玉双紙

全三冊

蘭更技

先づ公孫門人に書ふあり一紙を伊豆土芳
名に記さるなり大工傳説不詳あり出し

芭蕉誌

全二冊 肌後文曉著

芭蕉公孫門人ふ存存の一紙を志来小紙等より
ふ通あり一を長徳印七多事記と一書なり

冬北日注解

全二冊 浪華升六著

法家乃後をまゝく筆くくく解ん
深に世工傳説と稱する紙々をのぞ

かけこ

首書に孝孝と如古今法名家内自か
あつたゆゆ伝説とまのゆし 全二冊

道力便

古人明水の著乃乃及格書を
刪補と一書し

全二冊

此書ハ蕉門傳説の故を多く古格の白紙等々一且其白
付た力伝説とありてハ古古書を格筆とよくけるの佳境とあり

梅翁宗因發句集

全一冊 浪華一吹菴著

世説

芭蕉公孫門人カリ状と云らん
全五冊

蘭更選

芭蕉翁消息集

著乃乃書梅傳説不詳あり其の物語をあり
并しに付ありと云らん 全一冊 蘭更著

去来文

去来浪化伝説等其の文集よりその詞と
一巻去来浪化等其の彫別凡 全一冊

麻如堂

那傳不詳あり古人の書稿秘通あり
全一冊 栗津 重厚著

一夜四哥仙 栲良 葦村 几董 嵐山 全二册

同續 曉臺 青蘿 几董 日溪 全二册

葦門 栲良 葦村 麦水 全六册

中奥 今考う葦門と称する家多くは六人なり其家奥に葦門
中奥乃名家し其家と撰と書六歌をありて并傳と係と云ふ

四季 詞寄 袖巻し子 懐中本 壹册

四季 詞寄 糸車 修工巻白付白紙使とれる
古人丸白とありて 懐中本一册

葦村七部集 各枚あり焼失せしなり
未刻 小刻と云ふものあり 全二册

其雪敷 明 鳥 一夜四哥仙 桃李
統明鳥 五車及古 花身篇

周文集 未刻 葦野池竹ありて序跋の類
全一册 洛 月居輯

玉藻集 室女 冬月と云ふ名ありて女の
巻白とありて 全二册 洛 葦村著

栲良集 發句 附合文章 全三册

栲良拾遺 毒の巻栲良史の巻物の人妻林の初を破りてありて
葦門を中奥にし其家傳あり今二集と合撰て書あり

栲良拾遺 室のあり 中奥と云ふ 二集と追加して
小刻二册あり

百家仙 中奥葦門乃家百人試ありて
全壹册

八仙哥 名をいふ葦野仙ハ甚とありて
名は係以加ふ 全一册 洛 夫左著

若葉集

今時名歌三十二人余乃逸多像と加ふ

全一冊 玉屑著

伊丹風流

鬼貫白選七車ホキリ丸紙
全二冊 湖東紫英編

今風流

四季發句集 全二冊 洛其成編

柳志ろ

此書の附合七集日録は格違ホキリ
車更輯

俳題正名

此書の四季の細くその正字とくろり
全一冊 伏見響喬著

俳諧新式

四季の細にほと加ふ切字でにその秘傳
全三冊 付合よりきりおわくは集りたるり 響水

俳諧一枚起請

此書は俳門人許六の他は俳諧のむねふと
一枚起請ふさういであらゆるり 全一冊

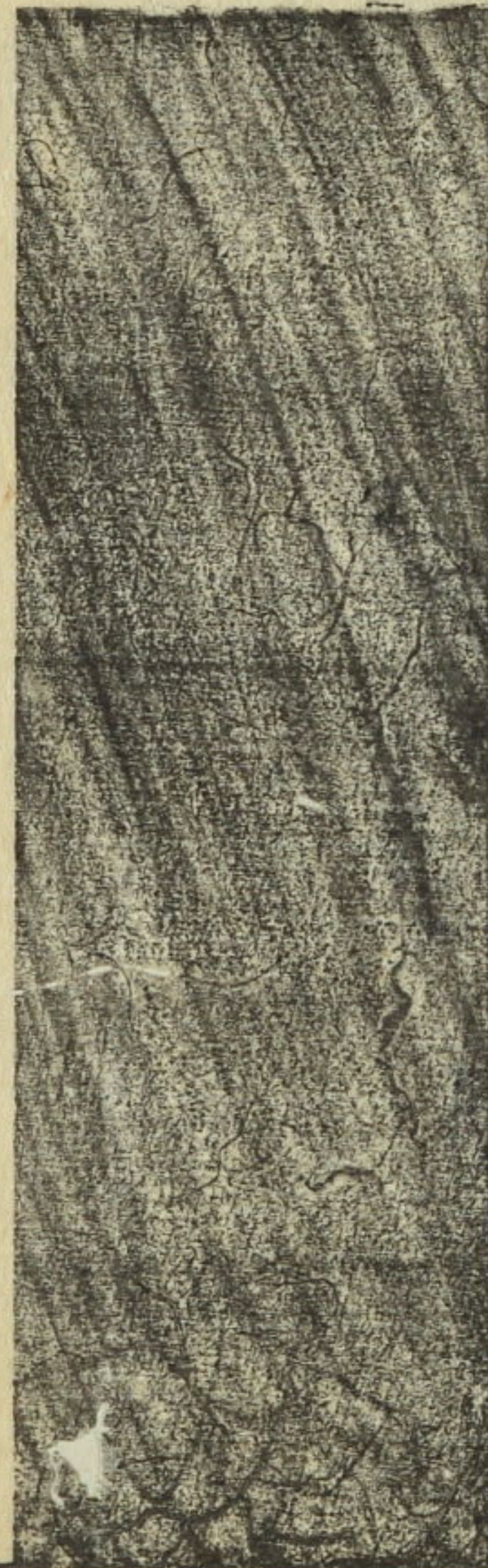
蕉門一夜口授

蕉門俳諧の愛記流の秘と門人の
向ひ書くる事 全一冊 加賀夏水

季寄手勝手

懐中本一冊 季寄手勝手は紙入
此書は季寄手勝手は紙入

此書は季寄手勝手は紙入
此書は季寄手勝手は紙入



205

03

蕉門俳諧書林

京三條通寺町西

菊舎太兵衛

和漢古書抄并經類其外色紙經冊画半切
板本細工清摺抄亦用此付下紙以切之

天明五年板



